

2024.2.14

篠原拓也

現代の子育て負担感の要因の一つに、子どもをめぐる神経症的な不安がある。ここで神経症的という言葉の本質は、安全や安心を求めて終わることのない悪循環にある。しかし見方を変えれば、その不安に対応する「安全」や「安心」の無限の追求が子育て負担感の要因でもある。現代では「子どもの安全」は最強の価値である。この価値は否定できない。しかしだからといってこれを過剰に追求することは、子どもを管理し、過剰な消費に誘導され、子どもをめぐるサービスの低質化さえ招きかねない。それは福祉文化論の観点からは、まったく福祉的とも文化的とも言い難い状況といわなければならない。

本稿では「子どもの安全」をめぐる問題と、対応する視点を示す。

### 無限に問題を創出する装置

私たちは「安全」や「安心」という価値は絶対に手放せない。これらは今や福祉〔well-being〕の必要条件に位置づけられている。私たちはただ生きるのではなく、安らかな心で生き、そして死ぬるように、一生これらの価値を追求する。

社会構築主義の観点からいえば、「安全」や「安心」は社会問題を無限に創出できる価値である<sup>1</sup>。これらは直接的に問題を表す語彙ではなく、目指すべき価値を表す語彙であるから、否定しえない。そしてこれらは次元の異なる広範囲の問題を同一地平線上に置いて——膝をすりむいてケガをすることからテロによる大量殺戮まで——危険やリスクという「問題」として構築できる。しかもそれは現実化していない可能性と、それへの不安な感情を材料として現実にある「問題」を構築するので、元手も不要である。「安全」や「安心」は、コスト・パフォーマンスの極めて高い形で、つまり資本主義に非常にうまく適合する形で、不安のマーケットを構築できる。完璧に安全で安心できる状況などありえない以上、私たちはどのような状況に対しても無限に「まだリスクが残っている」「可能性が0ではないから安心できない」と言い続けられる。そしてその無限の問題に対して、私たちはいつまでも「も

っと安心できる商品ができました」という広告に踊らされ、商品を購入し続けることになるのである。

私たちはよく生きることを、安心して生きることと読み替えており、その実、後者を優先しがちである。その結果、一つの逆説が起こる。「安全」は、死んだり苦しんだりせず自由に生きるための最低限の状態を保障する価値かと思いきや、いつの間にか最高の価値になっている。似たような価値に「生命」や「健康」がある。「命あつての物種」というとき、命は最低限の条件のようでありながら、最高の価値の座にいる。同じく、「健康」は自由に生活する上で最低限の条件かと思いきや、これも最高の価値である。現代では健康商品が溢れかえり、私たちはささいなことで医療機関に行き、多大な時間とお金、神経を使う。「健康のためなら死ぬ」とは（原点不明で恐縮だが）森田一義の名言らしい。これは本末転倒を揶揄している言葉ともいえるし、寿命よりも健康寿命を重視している言葉ともいえる、多義的な言葉である。いずれにしても健康を最高の価値として扱っている。

それらと同様に「安全」や「安心」はもはや（命の危険がなくても、健康的でなくても）命と同等の価値になっているのである。

### 最強の価値「子どもの安全」

そのような「安全」や「安心」の上に「子ども」が乗っかるとどうなるか。保護を受けるべき、幼く、か弱い子どもの安全や、子どもをめぐる安心となると、もう誰も反論できない。事故、犯罪、貧困、疾病、ハラスメント、搾取、受験や人間関係の失敗など、不安は尽きない。現代では大人たちが子どもをめぐる延々と「誤飲が」「発達が」「習い事が」「進路が」「不審者が」「アレルギーが」「転落が」「感染症が」「虫が」「交通が」などと不安を感じ、「安全」や「安心」と認めるハードルが異常に高くなっている。しかもそれを、その子どもの年齢や特性ごとに合わせて考える必要がある。乳幼児ならば誤嚥や転落の危険が強く意識されるが、中高生ならばそれよりも労働での搾取、不登校や自殺などが意識されるだろう。

安全や安心のハードルが高いことは、大人が子どものことを想ってのことであるから（そしてそのように振舞うことによって思慮のある冷静な大人という正しさのポジションを獲得するのだから）否定しがたい。

しかし例えば「安全」や「安心」という価値のもとで公園の遊具は撤去していくことは、それが子どもに提供する機会や可能性も撤去することである。都市部の子どもの遊びの場づくりの先駆者であり、日本のプレーパーク実践に多大な影響を与えたアレン・オブ・ハート

ウッド夫人は「心配のしすぎは子供の成長を妨げることになる。いろいろ工夫された、楽しくない、『安全な』遊び場に、非常にはっきりとこれを見ることができる」と述べている<sup>2</sup>。遊び場に限らず、教育や保育の現場では「安全」のために、日々さまざまな禁止や変更が行われている。例えば食事で「子どもの安全」を脅かす3大リスクは、誤嚥、食中毒、アレルギーである。これらを主張すると逆らえない空気になる。ある市立幼稚園ではミニトマトを育てていたが、誤嚥の危険があるといって禁止となった。同様におやつで出すぶどうや枝豆も禁止になった。餅などもってのほかである。文化的な行事を形だけやっておく必要があるため、とりあえず園で餅はつくものの、すぐに捨てる。持ち帰って保護者と一緒に食べるのも禁止である。誤嚥や食中毒の（そしてクレームの）リスクがあるからだ。節分の豆まきも狭い室内で少ししかしない。落ちた豆を食べてお腹を壊すとまずいし、ハトが群がって不潔であると保護者からクレームが入る。

ことは食だけではない。子どもが傷つく経験をする可能性もまた強い不安の種となるし、そこに政治的正しさ（ポリティカル・コレクトネス）が加わる。バレンタインデーは禁止である。保護者や関係者の中には、男女の役割期待が気に食わないだけでなく、チョコを貰えない息子の自己肯定感が下がるリスクがあるといって、不安に耐えられない人もいる。「母の日」も「父の日」もダメである。ひとり親の子どもが傷つくリスクがある（そしてクレームのリスクがある）。筆者の知る現場では「感謝の日」になっていた。あだ名やニックネームの類も、それを利用したいじめが生じるリスクがあるので禁止する現場もある。大学でさえ、自衛隊の紹介・案内ポスターを貼ると「武器が写っているので子どもが見たら危険だ」と言われ、剥がすことになった。アンパンマンの「アンパンチ」でさえ、暴力的で危険だとクレームをつける親もいる。これらは過敏な政治的イデオロギーによるところもあるが、とにかく何かを「問題だ」「やめろ」と迫るときのレトリックはえてして危険や安全をめぐるものである。

そのような神経質な大人は、正面から子どもに向き合っていないだけでなく、自分の認知の歪みや心の弱さに向き合っていないのである。また子どもに内発的な試行錯誤や反省による成長をみようとせず、自分たちの環境操作一つで子どもが思い通りに成長し幸せになると思っている点で、子どもを無意識にばかにしているのである。

しかしそれに振り回される現場も現場である。現場がどれだけ“専門性”を高めようと、不安を根拠にし、安全や安心を主張する保護者や世間のクレームに弱いと台無しである。そこで保育や教育の現場のほうも折れて認知が歪んでしまい、安全を守り保護者を安心させ

ることが専門性なのだと思える人も出てくる。ウェブサイトなどで安全・安全な保育を重視して「売り」として PR している現場も少なくない。

無論、安全を守ることを専門性とはいわない。例えば児童福祉の場合、その基本理念は「児童の最善の利益」の観点から児童の福祉を保障することであって、そのための知識・技術・価値を専門性というはずである。子どもの発達や自立の過程を考えて最善を追求することと、ただ安全を確保することは別である。「安全」とは、何も成長させないし、何も変化させない。ただそのままの状態が保たれていればよいという理念である。もっとも、現場は現場で、「安全とはいいい難いのでやめておきましょうよ」という具合で、安全を大義名分にして面倒な業務を減らしていることもあるのだが。

### 「子どもの安全」の過剰追求の問題

とにかくこうして安全への意識が高まっていく流れはおそらく止められない。特に近年、新型コロナウイルスへの対応においては、この風潮に黙食、手洗い、消毒、マスク、外出禁止、私語禁止、遊びの自粛などが加わって、多くの人がある極致を垣間見たところであろう。

「安全」と「安心」を並べる語法は 1990 年代から多くなり、2000 年代前半に漸増し、2006 年にピークに達した<sup>3</sup>。この 2000 年前後というのは、学校が要塞化し、地域社会がセキュリティ重視になっていった時期である<sup>4</sup>。それまでは学校の閉鎖性がいじめや暴力などの温床であるとして地域に開かれた学校を目指していたが、学校の周囲にフェンスや防犯カメラ、防犯センサー、IC タグで開く扉、警備員などを通した防犯対策を施して再び閉じる方向に向かい、児童の登下校に保護者や学校関係者らの巡回やパトロールが入るようになった。そして「まっすぐ帰りなさい」の言葉とともに、子どもの生活範囲の全般を「安全」で「安心」にする動きが生じた。

もちろんそれらは重要な方策なのだが、しかし子どもに危害を加える人々を監視するために、子どもたち自身を監視するという難題が残った。つまりセキュリティ重視の学校や地域では、不審者のみでなく子どもたちもまた、どこで何をしようとして監視され、管理されることになる。放課後に自由に道草を食ったりたまり場で遊んだりすることなど、子どもだけの空間や子どもが自発的に作る集団は縮小していき、その喜びや失敗を味わったり、そこからの学びや成長していったりする機会は乏しくなっていく。また「知らない人と話してはいけません」に象徴されるように、大人が体感治安の悪さを子どもに感染させることで、子どもにとって誰もが潜在的犯罪者となり、地域全体での子育てというトータルな意味で

はハードルが上がることになる。

監視・管理されると子どもは表面的には「いい子」になるし、大人もその点では安心するのかもしれない。しかし「安全」や「安心」を追求すればするほどかえって不安を引き起こすという悪循環がある。完全なゼロリスクはありえない。したがって安全の追求に終わりはない。家を出るときにガス栓が気になって戻り、かりそめの安心を得て、今度は窓の鍵が気になって戻る。神経症患者のように無限に不安が生じる身体が出来上がっていくのである。それは子育てにも置き換わる。

問題はそれだけではない。「安心」や「安全」を渴望する人は、過剰な消費へと誘導される。過剰な不安を埋め合わせるために、そこに過剰なお金と時間と労力をつぎ込んでしまう。保険屋のCMは「もしものことがあったら」と不安を誘い、そこに家族への愛情を織り交ぜ、保険サービスの購入によって安心させる。受験ビジネスも同じである。筆者は塾・予備校で講師をしていたとき、夏期講習で簡単な書類と親との面談を通して、何十万も払わせるのであるが、要は保険屋と同じである。親という生き物は、安心と愛情を織り込ませたレトリックでこうも簡単に財布を開くのかと不思議に思ったものである。「周囲がもっているから」という理由で子どもに買ってしまう玩具やゲームもそうである。経済学や社会学ではこれを「消費の社会的強制」という。CMに煽られたり周囲の目を気にしたりして、保険に入る。学習塾に入れる。漫画やゲームを買う。あれこれ理屈をこねて子どもに干渉する。もちろん主観的には愛情の衣をかぶせている。しかしそれを剥ぎ取るとその正体は不安なのである。「それは子どもの将来のためでもあるから」といいつつ、子どもの将来の幸福よりも、現在の不幸を避けるためにエネルギーを費やすのである。

「子どもの安全」を過剰に追求する社会では、安全だが低質なサービスが蔓延する。先述の通り、子どもを危険から保護するために、子どもを徹底的に監視し管理してしまうというのは難題である。これを放置すると善意でも無意識に悪徳ビジネスになってしまう。例えば、保育の現場で安全だけを徹底的に追求して行き着く先は、狭い部屋に閉じ込めてDVDの映像を垂れ流すだけの状態である。そこまでひどくはないにしても、新型コロナウイルス対策はそれに近かったのではないか（そうならないよう多くの現場が努力していたことは承知しているが）。安全のために子どもたちを家に閉じ込め、場合によっては町も国も塞いでしまう。マスク着用を強制し、会話も禁止し、修学旅行も画面越しで行う。安全のために、とにかく国民一丸で不自由を許容する。もちろん「安全」は否定できない価値なので、仕方ない。ただし仕方なく「安全だが低質なサービス」が蔓延するのである。大学では低質な教育

サービスに耐えかねて「学費を返せ」という運動が起きたところもあった。

コロナとは別に一例をあげると、児童虐待への行政の対応もそのようなところがある。現代では児童虐待が頻繁にニュースになり、児童相談所の負担は増加する一方である。忙しい都市部では「安全」確認のための介入で手一杯になっている現場もある。結果的にメインの業務である親子への「支援」に時間をかけられず、家庭支援を疎かにする。世論の厳しさを受けてとりあえず目先の安全確認のための介入は積極的に行うが、本来の業務である子どもや家庭を救うための福祉的支援は（介入とは異なり、地道な支援には世間の関心や監視がほとんどないこともあって）不十分になる。つまり、安全だが低質なサービスに陥ってしまう。

### 奪ったものを取り戻し、創造する視点

そのような「子どもの安全」という最強の価値の暗面とどうつき合えばいいのか。「子どもの安全」という究極の価値を否定することはできない以上、それはそれで妥協しつつも、「子どもの安全」を追求する陰で奪われた大事なものをどこかで代替し、取り戻すことが望まれる。もっとも、子どもから特に何かを奪うことなくできる安全の策もあろう。例えば近年のニュースでいえば、高層マンションのベランダからの転落防止や、幼稚園バスでの置き去り防止などである。しかしもし、感染症に対する安全という大義名分で子どもに旅行や文化活動への参加を禁止するのなら、そこで得られたはずのものに代わる貴重な経験を別に何か提供することが望まれる。また、児童相談所が子どもの「安全」確認のためといって、家庭に厳しい監視や介入をするのであれば、それにより十分にできなかった、本来あるべき温かい丁寧な支援を連携機関で保障することが望まれる。親が子どものためといいつつ、不安からつまらないモノやサービスを買うのなら、そのお金で得られたであろう子どもの別の利益に想像力をもつことが望まれる。

安全の名のもとに失ったものを取り戻すことは、ときに現実的に困難であろう。例えば、学校で子どもの学習の時間を取り戻そうとすると、結局、行事を減らすとか、夏休みなどの休暇を減らすことになる。失ったものを取り戻すためにまた何かを失うのは虚しい営みである。お金にせよ、時間にせよ、マンパワーにせよ、ない袖は振れぬ。また単に形だけ、時間だけを取り戻せばいいのでもないだろう。現在の子どもの家庭の状況を見て、彼らに何が必要だったのかを考えながら行うことが望まれる。

このことは児童福祉を考える上では大事なことである。「子どもの安全」を追求すること

が専門性なのではなく、むしろ「子どもの安全」のために仕方なく奪ってしまったものを、取り戻し、保障する能力こそ専門性なのである。

そして福祉文化という点においては、私たちの生活世界の全般において、「子どもの安全」という最強の価値とどこで折り合いをつけ、どうつき合っていくかを考える必要がある。

安全を根拠に人間を不自由にする議論において、安全とはえてして確率論的な合理性や普遍性の文脈の概念であり、正しさの文脈で理解されるものである。しかしながら福祉文化における福祉 [well-being] とは、well の概念がそうであるように、正しさでは説明がつかない精神的な豊かさを含んでいる。まして子どもであれば、「児童の最善の利益」 [the best interest of the child] の the best や the child という、これまた正しさの追求では説明がつかない、個別の、広い意味での豊かさを含んでいる。

文化 [culture] も同様に、「安全」や「安心」の過剰な追求では得られない豊かさを含んでいる。福祉文化の「文化」とは、環境に働きかけてより善なるものを生み出し耕すというラテン語の cultura を意味する<sup>5</sup>。文化とは善性と創造性を含む概念である。それに対して、繰り返しになるが、「安全」とは何も成長させないし、何も変化させない。ただそのままの状態が保たれていればよいという概念である。つまり私たちは危険や不安に対応するために市場でどんな商品を創造できるかではなく、もっと直接的に、生活世界で子ども自身が何を内発的に行い、創造し、また大人がそのための自由の環境を創造できるかを問われている。

先述のアレン・オブ・ハートウッド夫人の名言に「心が折れるくらいなら、骨が折れる方がましだ」とある<sup>6</sup>。神経症に陥った日本人の不安な心が、この言葉の重みに折れずに耐えられるかはわからない。しかし「安全」や「安心」の盲信の先に文化はないし、福祉文化は到底ないだろう。

## 注

- 
- 1 山本功 (2013) 『『安全・安心』というるつぼ——生活安全条例を中心に』 中河伸俊・赤川学 編著『方法としての構築主義』 勁草書房, 36-51
  - 2 アレン・オブ・ハートウッド卿夫人 (2009) 『都市の遊び場 (新装版)』 鹿島出版会, p17
  - 3 前掲, 山本 (2013)
  - 4 中井孝章 (2010) 『リスク社会における子どもの安全・安心——“安全・安心”ファシズムを超

---

えて』日本教育研究センター。1990年から2000年代は、例えば1995年の元エリート学生らによるオウム真理教の地下鉄サリン事件、1997年の中学生による神戸市児童連続殺傷事件、2001年の大阪教育大学附属池田小学校殺害事件、2004年の奈良小1女児殺害事件など、センセーショナルな報道がなされ、世論の不安と体感治安の悪化から、子どもは被害者にも加害者にもなりうる存在として、保護と管理の対象としての性格を強めた。

5 一番ヶ瀬康子（1997）「福祉文化とは何か」一番ヶ瀬康子・河島修・小林博・藪田碩哉編『福祉文化論』有斐閣ブックス, 1-11.

6 この発言はおそらく事実であろうが、筆者の文献調査能力の限界もあって、実際になされた場面はよくわからない。専門的な文献でも「...と伝えられている」と伝承化している（例えば、Bob Hughes, 2011, *Evolutionary Playwork*, English Edition, 2nd ed., Routledge）。冒険遊び場のリスクについて問われた際にそう答えたともいわれる（例えば、BETH COLLIER, 2022, *The Godmother of Play The no-nonsense Lady Allen put Adventure Playgrounds on the map.* <https://bethcollier.substack.com/p/the-godmother-of-play>）。ご存じの方がいれば教えて頂けると幸いです。